

3年1組

 自らの願いをもって動き出していく子ども
 ～養豚から学ぶ 命の重み～


豚と共に歩む

わたしたちの暮らし

体重約40kg 雌の子豚です。どうぞよろしくね！



8月24日、ついに1組に豚がやってきました。待ちに待った豚と共に歩む暮らしが始まったのです。午前10時。ゲージに入れた豚を乗せ、塩尻にある家畜試験場からやってきました。きっと、慣れない空間、知らない人、家族と離れてしまった不安があったのでしょう。豚は、車に乗っている間、何度も暴れ、大きな鳴き声をあげていました。

無事に学校まで行くと、子どもたちはもう豚小屋の前で、今か今かと待ち構えていました。そして、いよいよ豚との初めての出会いの瞬間です。バックドアを開けた瞬間、「きゃ～かわいい」と歓声が上がったり、「思ったより大きい！」と驚きの声が上がったり、「生の豚、初めて見た、すごい、生の豚」と興奮をしたり、「なんか臭い・・・」と鼻をつまみながら家畜特有の匂いに反応したりと、思い思いに声を上げていました。そんな中、Aさんは、「ようこそ附属長野小へ。今日からよろしくね」と語りかけている姿がありました。Aさんは、この養豚プロジェクトを立ち上げた時に、「動物は苦手だけれど、大切ないのちを守りたい」とふりかえりカードに綴っていました。今日から始まる豚との暮らしに不安を抱えながらも、夢と希望を膨らませ、新たな一歩を踏み出そうとしているように見えました。



高木建設のみなさんと一生懸命つくりあげた養豚場に私たちの豚が足を踏み入れました。これまで屋内の環境整備された中で過ごしてきた豚にとって、土や草、太陽など自然のものと初めて触れる瞬間でもありました。戸惑いながらも一步一步、土の感じを味わうかのように歩き回る豚。そんな様子を見た子どもたちは、「私たちも中に入りたい！」と居てもたってもいられずに続々と中に入ってきました。「ねえ触っても平気？」と恐る恐る背中を触るBさん。ビクッと怯える豚。それにビクッと怯えて後ずさる子どもたち。本物の豚を目の前にし、かわいいと思うけれど、まだまだ怖くて近寄れない、そんな距離感がありました。



次の日の朝、Cさんはドアを突き破るかのような勢いで教室に入ってきて、「先生、ぶーちゃん元気？」と息を荒げて言ってきました。「行っている？もう行っている？」と言うと、ランドセルを床に置き去りにして豚小屋へ駆け出していったのです。豚小屋の前に行くと、「おはよう！ぶーちゃん」と大きな声で挨拶をして中に入っていました。豚は、それに応えるかのようにCさんのところへ近づいてきました。そして、服や靴を噛んで、じゃれてきたのです。そんな豚に寄り添いながら、視線を下げ、話しかけるCさん。こうしてお世話をすることに喜びを感じながらも、託された

るかのようにCさんのところへ近づいてきました。そして、服や靴を噛んで、じゃれてきたのです。そんな豚に寄り添いながら、視線を下げ、話しかけるCさん。こうしてお世話をすることに喜びを感じながらも、託された

命を守っていくことへの不安や、この先に待ち受けているであろう問題に子どもたちは立ち向かっていかなくてはなりません。様々なドラマがこの豚を中心に巻き起こっていくことでしょう。豚と共にあるくらしからみんなで成長していきたいと思います。

～ぶーちゃんとの出会いの歌（1番）～（ぶーちゃんと呼び名）
 ねえ うちのクラスの ぶたさんの おはなし 聴いてくださいよ
 8月24の日に うちのクラスに来たんだよ かっぱをかみかみ
 ズボンもかみかみ ときにはホースも かんじゃって 土を食べて
 土にうまって 水をよごして ごはんこぼす
 育てるの たいへんかも… お世話できるのかなって 不安だった
 でもね 何事もなく 出会えてうれしい くらし楽しい
 ぶーちゃんかわいい もうこんなに大きくなった
 どうか 病気にならないで
 ぼくたち 命守っていくよ この子に出会えてほんとに嬉しいんだ



10月になり、あれだけ暑かった日差しも和らぎ、肌寒い季節がやってきました。家畜にとっても厳しい季節の突入です。「ぶーちゃんのために私ができること」をいっぱい取り組むことにしました。



ぶーちゃんの体重を知りたいと願い動き始めた子どもたち。「体重計には動くからのせられないよ」というDさんの発言から、体長や胸囲から体重を算出する方法を紹介しました。さっそくメジャーを使ってぶーちゃんを測るEさんとFさん。体長は120cm、胸囲は103cmでした。そこから、算出されたぶーちゃんの体重はなんと…97kg!! この数字を聞いた子どもたちは騒然としました。「120kgくらいで出荷なんですよ？え？もうすぐじゃん」とGさんがつぶやくと、「そんなはずない!」「やだ、早すぎるよ」「ダイエットさせよう」などと様々な意見が教室中に飛び交いました。「でも、出荷する豚の大きさとって体重じゃなくて、見た目でどのくらいなのか？いつが出荷なの」というHさんの問いから、『出荷』について本格的に考えていくことになっていったのです。

朝の会での恒例となった『今日のぶーちゃんコーナー』で「ぶーちゃんなんだか元気ないよ」「餌をあんまり食べてないね。寒いからかな」と豚の様子に変化があったことを伝えてくれた当番の子たちがいました。そこで、保護者の方々からいただいた貴重な藁を使って、豚小屋を“藁のお家”にリフォームし、温かい小屋作りをすることになりました。すき間風が入らない様に藁で小屋の隙間を埋めていきます。寝床には、これでもかというほどの藁を敷き詰めました。この藁も、はさみで丁寧に4等分に切ってくれた子どもたちのおかげです。ふかふかの藁ベッド、藁の壁、中に入ったIさんは、「あったかい。これならぶーちゃん安心して眠れるね」と言いながら、自らも横になり、目をつぶって寝ていました。そこへ、ぶーちゃんが小屋に入ってきて、その横で大はしゃぎ。嬉しそうに尻尾を振って、「フゴ！（ありがとう）」と言っていました。

更衣室のそうじ、長靴洗い、水たまりに土を入れる、うんちを取り続ける、みんなのカップを洗う、ぶーちゃんの体にハッカ油を塗ってあげる、落ちていた石や危険なものを拾う、藁をリアカーで何往復も運ぶ、石灰をまく…子どもたちは泥だらけになりながら、水浸しになりながら、汗だくになりながら一生懸命お世話をしています。「すべてはぶーちゃんのため!」を合言葉にして。

ぶーちゃんのえさのために

いざ『びんずる市』へ

年の世界情勢の煽りを受け、どんどん高値になっていく家畜の餌。ついに私たちのクラスのお財布事情にまで影響を及ぼしてきました。1月18日にぶーちゃんの出荷が決まり、2か月弱の餌代をどうしていくか子どもたちと話し合いになりました。「お家の人もらえばいいよ。俺の貯金も出すよ？」と話すJさん。「でも、足りなくなったからお金くださいっていうのもどうなのかな…」と返すKさん。「じゃあみんなでお金稼ごうよ！何か売ってさ」と提案するLさん。「いいね！I」とざわつく教室。でも、どこで？・・・。

昨年の6年1組にお姉さんがいたMさんは、クラスの中核活動である竹とんぼを善光寺のびんずる市で出店し、ワークショップを開いて多くの人が集まっていたことを教えてくれました。そこで、びんずる市の事務局へ連絡したところ、12月10日（土）に今年最後のびんずる市を開催することを教えてもらいました。ここから、ぶーちゃんの餌代を稼ぐための「びんずる市出店プロジェクト」が始まったのです。

何を作って売ろうか、国語の「班で意見をまとめよう」という単元で、プレゼンテーションを班で考え、全員で話し合っていました。そこで選ばれたのが、『アイロンビーズコースター&箸置きセット』『手作りハンカチ』『スノードーム』『缶バッジキーホルダー』の4種類でした。日常的に使ってもらえるものや、これからのクリスマスシーズンを見据えたものなど、お客様を意識したラインナップとなりました。



生まれて初めてのハンカチ作りに挑戦した子どもたち。ミシンの使い方を家庭科専科の先生に教えてもらいながらの製作になりました。本来であれば、5年生の家庭科の授業で扱うミシンですが、ハンカチ作りのために子どもたちに教えてもらうことになりました。裁ち切りバサミで布を切ること、アイロンのかけ方、上糸や下糸をミシンにセットする方法、そしてミシンの縫い方を丁寧に教えてもらい、実際に縫ってみました。「わー一曲がった」

「難しい」と言いながら初めてのミシンに振り回される子どもたち。何度も挑戦する中で、Oさんは「これは納得の1枚だ。絶対売れる！」と自信満々に完成したハンカチを掲げ、嬉しそうな表情を浮かべていました。そこから、何日もかけてOさんは15枚以上のハンカチを作りました。布に合わせた糸の色、真っすぐに縫われたミシンの線、きれいな正方形のかたち。まるでハンカチ職人のような手裁きで作っていく様子に驚かされました。「ぶーちゃん

の餌代を稼ぐために」という目的意識の中で活動し、成長していく子どもの姿を目の当たりにして、改めて必要感をもって学びに向かうことの大切さを感じました。

びんずる市本番は、天気にも恵まれ、多くのお客さんが城山公園に足を運んでくださいました。目標にしていた金額を売り上げ、ぶーちゃんの餌もこれで一安心。多くの皆さんにご協力いただいたことに感謝です。



300 円になります
今、お包みしますね
お買い上げ
ありがとうございました！

いらっしゃいませ！
どうぞ、手に取って
ご覧になってください



みんなでいっしょけんめいじゅんびしたびんずる市に行きました。楽しみにしていたけど、行く前はきんちょうしていました。でも、朝、城山公園に行くと、先生もいたし、どんどん友達も集まってきてワクワクしてきました。お店が始まるまでは、売れるか心配だったけど、始まってみると、足を止めて見てくれたり、話しかけてくれたり、たくさん買ってもらえてすごくうれしかったです。ぶーちゃんのおかげで、いろいろな人とつながることができたし、物を作って人によろこんでもらえるうれしさを感じた1日でした。

ぶーちゃんという私たちの大切にしている存在「もの」がいることで、思いがけないような様々な「こと」が起こり、色々な「ひと」と出会ってつながっていくことの素晴らしさを感じます。残されたぶーちゃんとの時間を一日一日大切にしていきたいです。1月にはいよいよ出荷です。これまで幾度となく話し合いを続けてきた子どもたち。この先にどんなことが待ち受けているのでしょうか。子ども達とぶーちゃんのドラマはまだ続きます。